

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
584	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Developing a genetically informative measure of alcohol consumption using past-12-month indices. 過去 12 ヶ月の指標によるアルコール消費量の遺伝学的に有用な指標の開発	
<b>執筆者</b>	
Agrawal A, Lynskey MT, Heath AC, Chassin L.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
J Stud Alcohol Drugs. 2011 May;72(3):444-52.	
<b>キーワード</b>	
飲酒、要因スコア、遺伝子、環境	
<b>要 旨</b>	
<p><b>目的：</b> 本研究の目的は過去 12 か月間の飲酒量から由来する要因スコアを開発する事である。</p> <p><b>方法：</b> データは、the Adult and Family Development Project (N = 734) と the Missouri Adolescent Female Twin Study (N = 3,787) の 2 つの研究から得られた。飲酒の 4 つの指標 (量、頻度、酔う頻度、5 回またはそれ以上/日の飲酒頻度) を分析する要因とした。そして、因子負荷量の相違は性、民族/民族性、研究の中の因子負荷量の違いを検定された。これらの要因の相関関係は、これらの評価と親と自己申告の評価を併せて計算された。最後に、古典的な対のデザインを使用して、過去 12 か月に及ぶ飲酒要因の相違は付加的な遺伝子(A)、共有環境(C)、非共有環境(E)の影響に分類された、そして、これらの要因が生涯の飲酒もっとも大きく影響しているのではないかと検討された。</p> <p><b>結果：</b> すべてのグループで因子負荷量は、性別、人種/民族、および研究全体に因子負荷量が異なるため、いくつかの証拠と高かった (0.69-0.95)。因子間の相関は 0.22 から 0.62 の範囲であった。親と子孫飲酒の間で内波の相関関係は、遺伝学的解析は、付加的遺伝子 (31%) と共有環境 (17%) の要因の両方に起因する家族性の影響の重要性を示唆し、0.25 だった。過去 12 ヶ月間と過剰な飲酒に関する遺伝的影響の重複は 0.97 であった。</p> <p><b>結論：</b> 過去 12 ヶ月間の飲酒対策から得られた因子得点は、遺伝性であり、大部分は、少なくとも若年成人で、過重な飲酒に影響を与える遺伝的要因によって影響される。また、中等度の飲酒に関しても同様の結果であった。大規模と小規模のゲノム研究は、同様のコホート研究のデータ分析で過去 12 ヶ月間の飲酒対策を検討するために用いられることが分かった。(J. Stud. Alcohol Drugs, 72, 444-452, 2011)</p>	